

科目名	分子生物学講義			分野・必選別・単位数	専門科目 (臨床検査医学)	選択	2単位
担当教員	◎教授 鈴木幸一 講師 関 玲子 講師 押鐘浩之						
課程	博士前期	配当年次	1年	配当学期	後期	授業方法	講義
授業の概要	さまざまな疾患における遺伝子発現の異常の有無などのデータに基づいて、疾患の分子医学の本質に迫る研究の基礎を学ぶとともに、遺伝子操作や再生医療、発現ベクターの使用による遺伝子治療という応用を進めるための基礎となる分子生物学、分子遺伝学教育を行う。						
授業の到達目標	①一般の分子生物学的事象について概説できる。 ②疾患にかかわる遺伝子異常のあり方を説明できる。 ③分子生物学的方法論とその応用について説明できる。						
授業計画	回数	担当者			行動目標		
	1	鈴木 幸一	教授	関心のある臨床研究および院内感染事例について分子生物学的方法・分子疫学的方法がどのように利用されているか説明できる。①			
	2	鈴木 幸一	教授	関心のある臨床研究および院内感染事例について分子生物学的方法・分子疫学的方法がどのように利用されているか説明できる。②			
	3	鈴木 幸一	教授	関心のある臨床研究および院内感染事例について分子生物学的方法・分子疫学的方法がどのように利用されているか説明できる。③			
	4	鈴木 幸一	教授	関心のある臨床研究および院内感染事例について分子生物学的方法・分子疫学的方法がどのように利用されているか説明できる。④			
	5	鈴木 幸一	教授	臨床で原因遺伝子が不明である疾患や免疫学的疾患のように遺伝子多型との関連がやや弱い疾患において遺伝子検査学的方法がどのように応用されているかを説明できる。①			
	6	鈴木 幸一	教授	臨床で原因遺伝子が不明である疾患や免疫学的疾患のように遺伝子多型との関連がやや弱い疾患において遺伝子検査学的方法がどのように応用されているかを説明できる。②			
	7	鈴木 幸一	教授	臨床で原因遺伝子が不明である疾患や免疫学的疾患のように遺伝子多型との関連がやや弱い疾患において遺伝子検査学的方法がどのように応用されているかを説明できる。③			
	8	押鐘 浩之	講師	実際に行われた分子生物学的あるいは分子遺伝学的研究の実例について学び、その過程を追体験するとともに、自らの着想でさらにどのような研究を進めることができるか考える能力を養う。①			
	9	押鐘 浩之	講師	実際に行われた分子生物学的あるいは分子遺伝学的研究の実例について学び、その過程を追体験するとともに、自らの着想でさらにどのような研究を進めることができるか考える能力を養う。②			
	10	関 玲子	講師	院内感染原因菌の分子疫学に遺伝子検査学的方法および統計学的手法がどのように応用されているかを説明できる。①			
	11	関 玲子	講師	院内感染原因菌の分子疫学に遺伝子検査学的方法および統計学的手法がどのように応用されているかを説明できる。②			
	12	関 玲子	講師	院内感染原因菌の分子疫学に遺伝子検査学的方法および統計学的手法がどのように応用されているかを説明できる。③			
	13	関 玲子	講師	院内感染原因菌の分子疫学に遺伝子検査学的方法および統計学的手法がどのように応用されているかを説明できる。④			
	14	関 玲子	講師	院内感染原因菌の分子疫学に遺伝子検査学的方法および統計学的手法がどのように応用されているかを説明できる。⑤			
15	関 玲子	講師	院内感染原因菌の分子疫学に遺伝子検査学的方法および統計学的手法がどのように応用されているかを説明できる。⑥				
事前事後学修の内容およびそれに必要な時間	【事前学修】	指定したテキストの次回授業部分を事前に読んでおくこと。 次回の授業内容を予習し、用語の意味等を理解しておくこと。					
	【事後学修】	授業中の疑問点をまとめ、関連する文献等を利用し、次回授業までに解決しておくこと。					
	【必要時間】	当該期間に30時間以上の予復習が必要。					
教科書	随時 指示する。						
参考書	随時 指示する。						
成績評価の方法および基準	口頭試問80%、授業内課題20%						
その他履修上の注意事項	試験やレポート等に対し、講義の中での解説等のフィードバックを行う。 カリキュラムマップのDP1が、この科目と本専攻の学位授与方針との関連を示している。						